巻 頭 言

平成22年度心理福祉学部紀要の刊行をお喜び申し上げます。

さて、本年度をもって、地域福祉学科の野口晴利教授が特任教授の定年となり本学を退職されます。野口先生は本学の生き字引のような先生であり、女子大学時代から男女共学化、そして大学学園前キャンパスの設置にいたるまで、帝塚山大学の発展とともに過ごされました。大学のために尽くされた先生の貢献はきわめて大きいものがあります。なかでも記憶に残っているのが、教養学部時代に、野口先生や相川先生らと推進した生駒研究会の活動です。生駒市民の方々も巻き込んで月一回の研究会を大学で実施すると同時に、生駒のエリアを実地調査し、街づくりについて提言するなど活発な研究実践活動を展開しました。大学教員だけでなくゼミ所属の学生たちも研究会活動に関わりました。最近の地域連携の大学教育の先駆的なものであったと感じています。

野口先生たちとの大学教育の取組みが、現在のGPプロジェクトの先駆けである文部科学省の「特色ある教育研究」にも採択され、その資金を元に研究室を整備して、ゼミナール活動を中心に大学の活性化を図りました。こうした教育を進める過程で、当時所属していた教養学部「都市社会コース」の人気が学生の間で高まり、その後の人文科学部人間文化学科の設置に大きな力となりました。人間文化学科から発展したのが現在の心理福祉学部であることを考えると、改めて野口先生のリーダーシップとご尽力に感謝します。

先生のお人柄については改めて説明するまでもなく、学生につねに優しく心をこめて接しておられる姿は教育者の範です。今は取り壊された東生駒キャンパスの旧一号館一階のゼミ室で、先生は学生たちとワイワイと楽しく過ごされて、多くの学生の相談に乗っておられました。現在のように、学生相談室などがきちんと設置されていない時代でしたが、教員と学生の距離が近くて親しい、本当に幸福な時代であったと思います。

野口先生とのお付き合いは公私にわたりますが、学生たちと一緒に行った韓国・台湾旅行で、学生と熱い議論をされていた元気な様子が今でも目に浮かびます。いつまでもご健康に留意されて今後とも学部教育に熱心なご指導ご鞭撻をお願いする次第です。

心理福祉学部

学部長　蓮花　一己